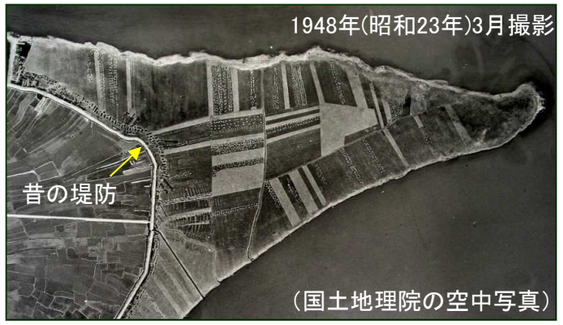
むかしの妙岐ノ鼻

左下の写真は1948年（昭和23年）の妙岐ノ鼻の様子です。現在(右下写真)の妙岐ノ鼻とは異なり、当時は、茅葺き(かやぶき)屋根等に利用するためカヤ刈りが妙岐ノ鼻のほぼ全域で行われていたことがわかります。
また、妙岐ノ鼻の南東には本新島干拓地がありますが、この干拓事業は1947年～1963年（昭和22年～38年）にかけて行われており、干拓完成前の様子もうかがい知ることができます。



妙岐ノ鼻観察施設のご案内

妙岐ノ鼻には、野鳥観察ステージ、野鳥観察小屋などの野鳥観察施設や遊歩道といった自然を観察する施設が整備されています。また、堤防沿いには、トイレや駐車場も備えています。
湖岸堤防よりも湖側に広がる妙岐ノ鼻は、水資源機構が管理しています。

水がささえる豊かな社会
独立行政法人
水資源機構

独立行政法人水資源機構
利根川下流総合管理所
〒300-0732　茨城県稲敷市上之島 3112番地
☎ 0299-79-3311（代表）Fax 0299-79-3316
https://www.water.go.jp/kanto/kasumigaura/
https://twitter.com/jwa_tonekaryu

ウェブサイトはこちら

（令和4年10月版）

豊かな自然が残る霞ヶ浦最大の湿原

妙岐ノ鼻

みょうぎのはな

冬になると訪れるハイイロチュウヒ

独立行政法人水資源機構　利根川下流総合管理所

人との関わりで維持されてきた良好な湿地環境

妙岐ノ鼻は浮島の東端に位置する霞ヶ浦最大の湿原で面積約50haを誇ります。かつては霞ヶ浦や利根川下流域にこのような湿原が広く分布しており、人々は湿原に生える茅（カヤ）や葦（ヨシ）を刈り取って屋根材や道具に加工して生活に利用していました。しかし、瓦屋根の普及、干拓などの農地開発、水害防止のための堤防建設などライフスタイルや土地利用の変化により湿原は減少していきました。

この妙岐ノ鼻にもヨシを主体とする湿性植物群落が分布しており、ヨシやカヤを刈り取って民家の屋根材に用いるなど古くから人間活動と関わりを持った生態系が維持されてきました。このことにより、環境庁による第２回自然環境保全基礎調査（昭和53年）では「郷土景観を代表する植物群落で特にその群落の特徴が典型的なもの」として「特定植物群落」に選定されています。この豊かな植生を求めて初夏にはオオヨシキリ、セッカ、コジュリンなどの繁殖地として、冬になると北方からチュウヒが飛来し越冬地とするなど多くの鳥類も訪れるため、バードウォッチングや自然観察の場としても人気です。このように、現在でも妙岐ノ鼻は人と自然との関わりの深い場所となっています。

妙岐ノ鼻で見られる鳥類

妙岐ノ鼻では、時期によって異なりますが20～40種類ほどの鳥類を見つけることができます。

オオヨシキリ（ヨシキリ科）

全国各地の水辺のヨシ原、水辺の低湿地に、夏鳥として飛来し繁殖します。
妙岐ノ鼻全体が営巣場所に適しており、それぞれの縄張りを作ってとても賑やかにさえずります。
種の保存法　指定なし
環境省RDB　指定なし
茨城県RDB　指定なし

スマホで鳴き声を聴いてみよう →

セッカ（セッカ科）

秋田県から沖縄県にかけての草原や水田に夏鳥として飛来し、チガヤなどのやや丈が低いイネ科の植物が茂るやや湿った草原を好み繁殖します。
妙岐ノ鼻全体が営巣場所に適しており、縄張りの境界に留まったり空中を飛びながらさえずります。
種の保存法　指定なし
環境省RDB　指定なし
茨城県RDB　指定なし

スマホで鳴き声を聴いてみよう →

コジュリン（ホオジロ科）

本州と九州の草原、干拓地の湿った草原、休耕地として放置された水田などで繁殖します。冬は、関東南部以南ですごし、特に東海地方、近畿地方、中国地方の沿岸地帯で多く見られます。繁殖期の雄は頭巾をかぶったような黒い頭が特徴です。
種の保存法　指定なし
環境省RDB　絶滅危惧Ⅱ類
茨城県RDB　絶滅危惧Ⅱ類

スマホで鳴き声を聴いてみよう →

チュウヒ（タカ科）

冬鳥として北海道から九州の湿地や河川・湖沼の岸辺などの広いヨシ原に飛来します。
猛禽類では唯一、垂直に飛び立つことができるとされています。
妙岐ノ鼻は国内有数の越冬地で、多い年では５０羽以上飛来します。
ねぐらとして利用していることから、朝の飛び立ちや夕方のねぐら入りの時によく観察することができます。
種の保存法　国内希少野生動植物種
環境省RDB　絶滅危惧ＩＢ類
茨城県RDB　絶滅危惧ＩＢ類

妙岐ノ鼻で見られる植物

妙岐ノ鼻では約１００種の植物を確認しています。

ヨシ（イネ科）

霞ヶ浦全域で見られる高さ２～３ｍの抽水植物で、茎を密生して大群落をつくります。

カモノハシ（イネ科）

高さ約0.6mの多年草で、夏から秋にかけてつける２本の赤紫の花穂がカモのくちばしに似ていることからこの名が付きました。

カサスゲ（カヤツリグサ科）

高さ約１ｍの湿生植物で、群落を作り、花を咲かせます。
昔は乾燥させた葉を蓑笠(みのかさ)に用いました。

カドハリイ（カヤツリグサ科）

湿地に生える多年草で、霞ヶ浦以外では確認されておらず、2022年（令和4年）に国内野生希少動植物種に指定されました。

妙岐ノ鼻のヨシ焼き「ヤーラモシ」と植物の成長

妙岐ノ鼻に生育するカモノハシは「茅（カヤ）」として刈り取られ、茅葺き屋根に利用されてきました。かつては住民が共同で利用する「茅場」として管理され、茅を刈らずに放置しておくと翌年の収穫量に影響するとされ、初午が過ぎた2月14日（旧暦）にこの湿原を焼き払う習慣（この地域ではヤーラモシ（野原燃し）という）がありました。このヨシ焼きによって茅の品質が維持され、樹林化を防いで安定した収穫が得られました。こうした先人の知恵は、現在では「ヨシ焼きにより枯死した植物が除去され、陽当たりと地表の温度条件が改善し植物にとってよりよい環境となる」ことが科学的に明らかになっています。

カモノハシを主体とした茅は「シマガヤ」と呼ばれ、耐久性に優れるなど品質が良く高い評価を得ています。妙岐ノ鼻のシマガヤは、水戸・偕楽園の好文亭をはじめ、この地域の文化財の屋根の葺き替えや修繕に利用されており、文化財保存修理の観点からも貴重であることがわかります。